

山名

第二号



鷲原寺所蔵十二天画像のうち毘沙門天像と山名宗全の署名と花押



垣屋三武将の武者絵（山本茂信氏蔵）

山名時氏

の

とき、新田大炊助義重が後援入義重の
次男義治を以て山名と号を義治

より時氏まで六代ある

よりそふ仕へて所の戒

場ば不ふ赴しゆして武ぶ勇ゆうの境きやうあり臨りん治ち

新友その真むちの虚名とひそ

いふものゝ余^{あま}
此を去國^{こく}ありと返りて討け

因貴不伯卷

玉女

のらさむち、とのら　ちんせ
後又赤松が堂と合戦ーうち勝て

周情伯著石見夷作丹後みき書懷藏とるねり



新刻日本百将伝「山名時氏」像（山本茂信氏蔵）

山名

題字

山名晴彦

村岡藩主山名家第十四世
全国山名氏一族会 総裁

山名

平成8年12月刊／第2号 目次

『新刻 日本百將傳』割載の

山名時氏・宗全の武者絵について……………太田 順三…4

専修大学教授

山名氏と岩美町……………吉田 政博…8

元岩美町郷土文化研究会会長

清和源氏と宇多源氏……………佐々木定道…22

富士重工業(株)名誉顧問

備後国と神辺城……………山名 年浩…25

関西大学教授

山名氏の光と影 ―山名宗全について―……………太田 順三…36

専修大学教授

山名氏一族会相談役

安田元久先生を悼む……………山名 章…46

山名氏史料調査研究会会長

垣屋三武将 武者絵掛軸について……………山名 章…49

山名氏史料調査研究会会長

執筆者紹介…54

会員だより…55

編集後記…56

『新刻 日本百將傳』 割載の

山名時氏・宗全の武者絵について

太田 順三

山名歴代の肖像画で、本人存命中に描かれ、
寿像として伝存しているものは、兵庫県美方
郡浜坂町田井の楞嚴寺所蔵の山名時熙寿像を
始め、京都市右京区花園の妙心寺塔頭東林院
および兵庫県美方郡村岡町法雲寺（山名寺）
の所蔵になる山名豊国寿像の数幅に過ぎず、
その数まことに寥々たるものといつてよい。

ところで、史上知られている山名宗全（持
豊）像についても明確な寿像は現在のところ
所在不明で、わずかに冊子本の挿絵として載
せられる程度の画像が今日知られているのみ
である。この像は、剃頭・法体姿の宗全を描

いた想像画で、恐らく、生前の宗全が赤ら顔
の毘沙門天の化身で赤入道と渾名されたこと
から佛法の守護神である毘沙門天に擬えて描
いたものであろうか。

今回ここに新たに紹介する画像は、山本茂
信氏の提供になる一勇斎と称した幕末の浮世
絵師歌川國芳の描いた多色刷錦絵による山名
時氏・宗全の武者絵であり、国芳晩年にあた
る弘化五年、『新刻日本百將傳』と銘打った
特集版画の綴本に登載されて世間に流布した
画像といつてよいものである。

時氏像（口絵写真参照）は、錦の織紋様直垂に、紫綾緘鎧・大袖付、兜を着用、大太刀を佩いて立て膝に身構え、左手に重藤の弓を持ち、背に革箆を負った凛々しく精悍な武者姿である。

画絨の袖に時氏の花押（実際の花押と異なる）をのせ、地の文で彼の来歴を次のように略述している。

時氏ハ新田大炊助義重が後胤也、義重の次男義範はじめて山名と号す、義範より時氏までは八代にあたり、尊氏に仕へて所々の戦場に赴きて武勇の聞えあり、塩冶判官高貞むほんの虚名を得て出雲國へ落ゆくを追かけて討、此恩賞に伯耆國を給はる、後又赤松が党と合戦しうち勝て因幡・伯耆・石見・美作・丹後五ヶ國の守護職となれり

宗全像（口絵写真参照）は、先づ、袖に

「七十歳にて死す」とあって、色々威腹巻、

大袖付、大太刀を佩き禿頭の法体姿で床几上に左脚を屈けて乗せ、右脚で大地を踏みしめる形で腰かけ、天を仰ぎ見る堂々とした姿に描かれている。この奇抜な構図は、宗全の躍動的な容態を瞬時に静止せしめた見事なもので、彼の人物像を活写した作品といつてよい。地の文に見る宗全の経歴には、

宗全は伊豆守時氏が玄孫他、父を宮内少輔時熙と云、宗全はじめの名ハ持豊といへり、時熙が跡をつぎて但馬國を領して右衛門督と号す、のち髪を剃て名を宗全と改む、其面あかきゆえに赤入道と云り、嘉吉元年赤松満祐野心を挟み、義教公を殺し播州へ下向する時、持豊その一ぞくをしたがへからめ手の大將として攻ければ、満祐叶わずして自害しぬ、此恩賞に播磨國を給ふ、のち細川勝元と戦ひ英にして病死す

とあり、来歴を記した地の文と勇壮な人物像



一勇齋・歌川国芳自画像
 (『国芳』より転写)

を一体化させた趣意の活写表現に成功を見ている。

元版の下敷となった錦絵の原画は幕末の浮世絵師で武者絵に通達した歌川國芳（一七九七年から一八六一年）の手になるもので、彼は寛政九年十一月十五日に江戸日本橋本銀町一丁目の紺屋のせがれに生れた。十五歳頃、一世を風靡した歌川豊國に入門、文化・文政期から幕末の世相の動乱期へ進む時代に活躍、役者絵・美人画・風景画・草双紙類の挿絵、錦絵漫画等々の作品に異彩を放ったが、やがて野心的で奇趣溢れる迫真の武者絵に開眼し、独自の才能を発揮して作画領域を拡げ、想像力を巧みに駆使した個性豊かな画境を開花させ、文久元年（一八六一）三月五日、六十五才で没した。

彼の画業の血脈は、最後の浮世絵師といわれる弟子の月岡芳年から、孫弟子で近代写実絵画の先がけとなり文化勲章を受賞した鏗木清方へと受け継がれたことはよく知られてい

る。

構図の野心的奇想さに趣向の斬新性が窺え、迫真感みなぎる武者絵ジャンルを開拓した一勇斎、歌川國芳の画業は江戸庶民に受け、「武者絵の國芳」の名声を博するに至った。鈴木重三氏編著の『國芳』（平凡社、一九九二年刊）によれば、著者は「通俗水滸傳豪傑百八人之一個」のシリーズなどの彼の武者絵は、文政、天保、弘化、嘉永、安政と、ほぼ改元に呼応するように発達し展開する。その様相を約言すれば、従来の古典性軍記紹介の姿から、近世後期流行の軍談調表現へ変容させたものであった。物語性への興味よりも、その題材が備えもつ勇壮性を描出強調した活写表現を趣意としている。』という評価を与えている。

弘化五年春、國芳画の『新刻 日本百將傳』は、江戸の版元として名高い山崎屋清七の山青堂が出版し、大阪、江戸の各書肆から発売され世間の好評を博したものである。

國芳が題材として取り上げた一〇〇人の英傑、武人の事績を何によって顕彰しようとしたのか、如何なる基準を以って一〇〇人を選んだのかはなお不明ではあるが、近世の後に山鹿素行の『武家事紀』や熊沢正興の『武家感状記』（別名碎玉話）など、武人の事績・性行等の優劣、得失、成敗などの研究が盛んとなったことの影響を受け、國芳がわが国における「百將」の英傑武人の事績、性行を研究し、簡潔な文章を付して人物画を錦絵として描いた、その一〇〇人の武將の中に、山名時氏、宗全の二人を選抜して取り挙げたことは、その風貌の活写表現と共に、その事績自体興趣に価するといふべきであろうか。

（おおた・じゅんぞう 専修大学教授）

山名氏と岩美町

二上(神)山城について

南北朝時代から室町時代にかけて約二百年の間、因伯の郷土は山名氏が支配していた。

因幡の拠点「二上(神)山城」は山名時氏の築城の後、氏冬の系統がこれを継いだが、文正元年(一四六六)但馬守護山名持豊(宗全)の子勝豊が現鳥取市布施の天神山城に移るまで、ここが因幡の本城の役目を持ったようである。築城時期の問題が残るが貞治二年(一二三三)としても、一世紀以上の長きに渡り因幡を統治する軍略上の拠点であった。

今、この城趾の位置を見るのに、東は峠を



二上山城址(岩常)

吉田政博

境で但馬に寄り、西は現福部村を目の下に塩見谷があり、榎峠が国府に通じて近い。

城下の因幡、岩常部落までは小田川が通じ、網代港湾が開けている。摩尼山には山道が通じ、靈山摩尼山頂より鳥取市賀露、鳥取平野は展望される。

国府町より南は、現郡家町私都谷に通ずることを考えれば、この拠点が安易にえらばれたものとは思えない。

城をはさんで二本の山越えの道が福部村側に通じている。高野坂より蔵見に通ずるもの、岩常部落より栗谷村に通ずるものであつて、先に述べた因幡国府、国府より現八頭郡と連絡できる道となっている。

満願寺谷を挟んで二上山城趾と満願寺のある山が相対し、この挟まれた谷の口が岩常村で、城下町として発展したのであつた。

満願寺（岩常の道場）の始期は判明しないが、文和四年（一三五五）時氏が神南山攻撃に敗戦した際討死にした味方の将士の供養を

営んだのがこの寺である。

とすれば、この時点で二上山城は存在しており、満願寺も城塞の一つをになつていたものと思料される。

城趾の近辺には、金、銀、銅の産出があり、鉾山資源にも恵まれていたことも記して置きたい。



二上山城 一の平で説明する筆者
(昭和 58 年頃)

築城時期と名称

二上山城の築城の年代については確証とすべきものはない。従来、古くは興国元年（一三四〇）説、文和年間（一二三二—一二三六）〇、守護に任ぜられた貞治二年（一二三六）以降などとするものがある。筆者は今のところ文和年間とするのが妥当ではないかと考えている。

しかし、いづれをとつても、当地に百年以上続いた城である。

『因幡志』は二上山城の築城にあたつて次のように述べている。土人口碑に云はく、往古二上山に祭神数社あり、山嶺に鼓の明神あり、東に天神社南に鐘撞明神、北に八幡宮あり、以上昔より二上山鎮座の神なり。然るに中古山名時氏二上の城草創の時に、諸社皆鼓山に移さる。此の地昔より鼓の宮を拝して二上神社とす 云々。二上の神社を鼓大明神と号するは両ヶ鼓の神を祭れるにや、然らば山

の名二上は二神山の誤りならん歟、としてゐる。

筆者も、二上山は二神山であつたろうと考えている。山の形態から考えても、奈良県北葛城郡当麻町の二上山（葛木二上神社）のように入頂が二つに分かれているとは認め難いからである。一の平、二の平の高低差は、遠望の山容からはあまり二上という名にはふさわしいものではない。また南側から望めば全く山頂は一つにしか見えない。

神南合戦と耳塚

文和四年（一二三五）二月六日、摂津国三島郡（高槻市内）神内（こうない）で山名伊豆守時氏は子息左衛門佐師氏と共に、因幡勢五千騎を引きつれ淀川をはさんで布陣した。『太平記』は、
「伊田・波多野・石原・足立・河村・久世・土屋・福依・野田・楯野又太郎・加地三郎・後藤耆岐四郎・倭久野修理亮・長門山城守・土師右京亮・毛利因幡守・佐治但馬守・塩見

源太夫」の名を挙げているが、この中には伯州や因幡とりわけ現福部村塩見谷の塩見源太夫の名に注目される。

この戦で師氏は重傷を負いながらもかろうじて死地を脱出したが、佐々木道誉の軍勢に打負けて多数の死者を出した。「宗トノ侍八十四人、其一族郎從二百六十二人、返合々々四・五町ガ中ニ討レニケリ」「右衛門佐ハ淀へ打歸テ、此軍に討レツル者共ノ名字ヲ一々ニ書注シテ、因幡ノ岩常谷ノ道場へ送り、亡卒ノ後世菩提ヲ弔ワセラレケル」（太平記卷三十二）とある。

耳塚とは、この合戦で討死にした者の耳をそぎ一々に名前を記し、岩常に送りその菩提をとむらったことによる。今は無いが耳塚と並んで本尊薬師如来を安置する耳堂もあった（『因幡志』）ようである。

現在ある耳塚は元禄七年、当村の小林次郎左衛門円清による再興である。

小林次郎左衛門は当時、山名の家老小林民

部之承重長の末孫と伝う。『太平記』の神南合戦に山名伊豆守を先トシテ小林民部丞・小幡・浅沼・和田・楠・和泉・河内・但馬・丹後・因幡兵共三千余騎ニテ、サシモ岨シキ山路ヲ盤折ニゾ上リタリケル。



耳塚と地蔵（岩常）

満願寺廃跡（岩常の道場）

先述した満願寺は、大杉山満願寺と云い、山名氏の菩提寺とされる。二上山城の北の谷、満願寺川を遡上して約三キロ、今は本庄地区向山と云い三軒民家（一軒は廃屋）があり、寺跡と推定される本堂、大教坊、玄海坊、マサカリ坊、門所などの地名を伝えており、竹林には五輪の墓るいるいとしてうず高く山をなし、昼なお暗い竹林の中に苔蒸して訪れる者に恐怖を感じさせる。

出土品等もあり、現在は県立博物館に四点を寄託している。筆者も、昭和四十八年十月、鳥取市教育委員会が「城下町鳥取誕生四百年記念」として行った歴史展に資料写真等出展協力して、当時の鳥取市長より感謝状を受けている。満願寺は恐らく秀吉の因幡侵攻の時期（天正八・九年）放火され消失したのであらう。

現在、岩常部落にある「安岳山常智院」が

旧跡を継いでおり、慶長二年（一五九七）光慶法印の再興により今の寺号に改められたものと寺伝に記す。



満願寺付近竹林の中五輪墓群



満願寺趾出土線刻佛像

二上峯地蔵

(昭和四九・四・一一 岩美町文化財指定)
現在、常智院境内に祀られてあるが、元あった位置は、前述した栗谷ごえの山道(岩常部落より福部村栗谷部落に通ず、その頃は軍用道路か)の栗谷側に近い場所に在った。正面は線刻の火焰地蔵で裏面に、写真に見られるごとく真中に「二上峯地蔵」下右側に「応安四年」と刻されている。応安四年(一三七一)は、山名時氏死去の紀年銘であることから、重要視される。

今も七月の地蔵祭りが営まれている。ちなみに、鳥取市一行寺には因幡守護山名氏重により応安四年二月建立された「山名時氏寿塔」(宝篋印塔)がある。もとは久松山麓より掘り出されたものと云うが台座のみ存する。



(裏) 応安四年銘



(表) 二上峯地蔵線刻

本光寺

端応山本光寺は今、恩志五番地ノ二に所在する。山名氏との関係は、応永元年（一三九四）の頃、領主山名中務大輔（熙貴）の帰依に発すると寺記にあり、永享五年（一四三三）山名氏の発願により恩志村字絵下原に新宇を建て拈笑山本光寺と称し、寺領百石を寄進し、南章和尚を開山としたのが始まりで、山名氏を開基としている。寺の後が寺山城である。

拈笑山を改め端応山と改号したのは十四世華山和尚（享保十一年）の時である（寺記）。

道竹城

文正元年（一四六六）二上山城主勝豊が鳥取市布施の天神山城に移って以後の後継の城である。現岩美町新井にある。

但馬国出石城下宗鏡寺の東揚藏主を還俗させて三上兵庫頭豊範と称し城主とした。

天文十年（一五四一）六月この道竹城をめ

ぐって「岩井表合戦」（『稲葉民談記』『中村文書』）があり、布勢の山名誠通との合戦であった。

廃阿代寺正平在銘鐘（鳥取県保護文化財）
因州巨濃郡岩井庄阿代寺鐘事

右為意趣者天長地久祈願円満国土泰平

庄内安穩、殊寺中繁昌故也

正平十五年庚子十一月日 敬白

大願主 僧行快

正平十五年（一三六〇）は、南朝年号であり、この頃、時氏は尊氏から離反し南朝にも款を通じて、反幕府活動を展開していた。

岩井庄は現在の本庄、新井、河崎、太田辺を中心とする地域で、早く開けた所である。

十五世紀中頃には、三上氏（近江系）が勢力を扶植していた（『因伯の戦国城郭』）と云う。

康正二年（一四五六）造内裏段錢并国役引付

に三上入道、一〇貫文、因州岩井庄段錢とある。

『周通（近江入道）』以来の三上氏は、近江三上郷を本貫とする、御上（三上）社祝家の出身と思われる。岩井庄には、後に但馬山名氏に連なる、三上兵庫頭（山名東揚）が登場するが、全く異流である。（『因伯の戦国城郭』）



道竹城址を望む（新井）



牧谷 一上城址を望む

一上城趾（牧谷にあり）

一上彈正の居城だと伝えられるが詳しいことはわからない。牧谷部落は海辺にあり、こ

の城も海浜に寄っているから、海路を利用しての但馬とのつながりの城の性格があるようである。もと牧谷村は古くは吉田村といい、日野郷に属し吉田保と云った。康正二年の段錢では二貫文とある。その後は吉田牧谷村といった。城の西側を吉田川がゆるやかに海に入り、外堀をなす。南は広い湿地帯となり、西側は尾根つづきに日野谷につながる。北はもちろん日本海である。

恐らく、秀吉の但馬攻略の頃落城したものと推定されるが、城主は但馬の長氏の同族かと考えられる。

比丘尼城、猫山城、二、三のとりでがある。この他、駒ヶ谷、鷹匠屋敷（鷹居）などの地名がある。また、浜田千軒という（浜田は字名）伝えもある。

桐山城趾

これも、浦富と田後の間にあつて、海辺の城である。元龜三年（一五七二）尼子の遺臣

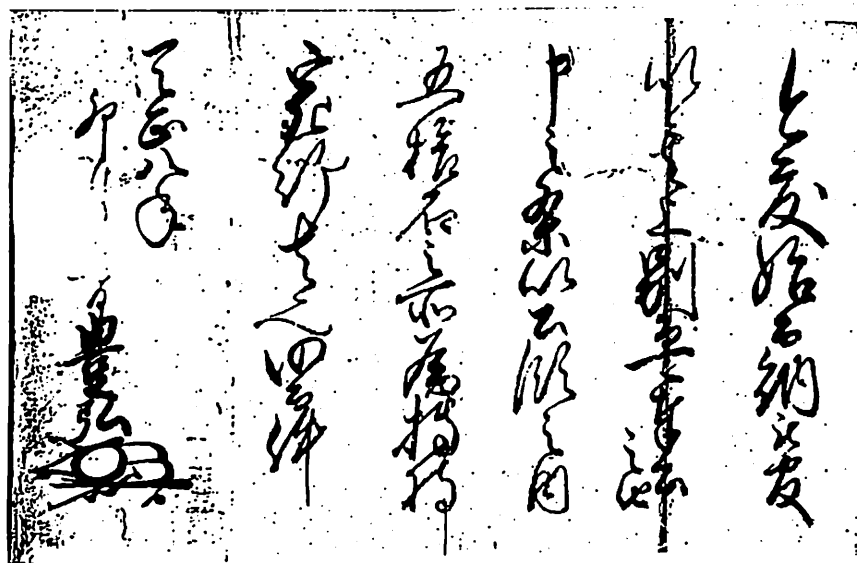
山中鹿之介が暫く奪取逗留していたことがある。

山名氏との関係は、天正八年（一五八〇）秀吉の鳥取城攻めにあたつて、但馬山名旗下にあつた垣屋光成を翌年天正九年（一五八一）この城に入れて但馬との拠点となさしめ、鳥取落城し、因幡を平定したあと垣屋光成をその功により、巨濃郡一万石に封じた。垣屋は父子二代で関ヶ原戦後断絶した。城下浦富に垣屋八幡宮として祭られている。

中島城趾

陸上中島城は伯耆守護山名満幸の子孫である山名与七郎正義のときにここに転居し、国内の争乱に乘じ隣郷をしたがえわが領地とした。（天正一八年（一五九〇）没）。

この時期のものと思われるが、天正八年（一五八〇）四月寺谷惣左エ門と、十一月の中島四郎左衛門に与えた文書があるのでそのまゝ記す。（稻場民談記所収）



今度、始而納被官、

二一

以其上、別而可奉公之由

二一

申之条、以公領之内

一一

五拾石之所、為扶持

一一

宛行者也。依而件。

天正八年

卯月廿七日

豊弘（花押）

今度令む之以後、色々心付、
 殊更奉公を令する之段、神妙也。
 此切、弥新給出す可く覚悟に候と雖も、
 内證申分候之条、先前分の儀、因州巨濃郡
 宇治・大野・陸上之参ヶ所之儀・諸役共永
 代相違無く宛遺す者也。猶此以後、本意に
 任すに於て者、代官所之儀、壹貳ヶ所
 申付可也。弥忠儀を抽んでること肝要也。
 依而、後日の為、状件の如し。

天正八年

霜月廿六日

豊弘（花押）

中嶋四郎左衛門殿

花押をしている豊弘は、道竹城主山名東揚
 （三上兵庫頭）であるのか、別人かはつきり
 しない。

資料①は、寺谷惣左衛門が扶持として五拾
 石の知行地を与えられたこと、②は中嶋四郎
 左衛門が宇治・大野・陸上三ヶ所の村落支配

清溪寺水代堂遷
 石城をこれ以後
 おぼやきとけな
 多利不戸目と
 相違及所安と
 清溪寺

吉見系図
 吉見系図
 中務四郎

を保証されたものである。

二人は、領主である豊弘と主従の被官関係であり領主に対し忠勤を励むことを約束している。

天正八年といえ、但馬では秀吉のため出石城は落城し五月祐豊は病死して七代二百余年続いた但馬山名は滅んでおり、鳥取城では九月山名豊国を降していますが、そうしたあわただしい動きの中での文書の背景には興味深いものを覚える。

姥ヶ城主と吉見兵部

吉見兵部（家朝・弥次郎）は、吉見系図（姓氏家系大辞典）によると因幡吉見の祖のようであるが、暦応の頃（一二四〇）より因幡守護山名時氏に属し、小田谷延興寺の後山にとり出を築いていたが、のち山つづきの姥ヶ山に城を移した。

先述の康正二年（一四五六）「内裏段銭国役引付」には、因幡国高野郷小田保の段銭と

して二貫三三五文を負担している吉見弥次郎が出てくる。小田谷一带に勢力を有した地侍として、村落を支配して山名の被官の地位にあったものであろう。

巨濃郡小田谷の延興寺村、池谷村に散在していた「楽々賀名」たのきみょうに関する文書十七通（一



姥ヶ城址（延興寺）



吉見一族の墓地 とのむら（外村）

四六二年（一五七四年・寛正三年）天正二年までのもの）が『稲場民談記』に所収されているが、名田の所有者、田中善右衛門に対して、年貢や公事を貢納するかぎり名田（半名）の所有を認めている文書である。この中には、名田の宛行状と共に、所在、地積、反当年貢高、等がよみとれる。また、公事給は田中氏の給与と考えられ、小領主（この場合吉見氏）との被官関係を表わしている。小田谷一带を支配する姥ヶ城主吉見氏はまた、因幡の守護家に対し、主従関係を持っているわけである。

大野城

山田安芸守家治の居城で、家治（宗栄）の墓は岩井の観音堂前にある。永禄八年（一五六五）没しているが『稲場民談記』に所収の文書（大永五年一五二五）があるが、その頃、大野郷（岩井近辺）を支配していたものと思われる。

二代安芸守の位牌（法名心嚴周善信士）は天正十年（一五八二）二月十八日の死没を伝えてゐるから秀吉の鳥取攻めの時に落城したものと思われる。

高尾山城

蒲生谷の洗井村の山中幡ヶ谷にあり、やはり因幡侵攻の天正年間、但馬より入った秀長の勢力がここを本陣として牛ヶ峰（荒金の奥、山を越えれば法美郡雨滝村）蔵王社に籠る者供を攻めてゐる。

蒲生谷には有力土豪に蒲生氏があり岩清水

八幡宮の代官になっている。また、洗井村の横尾には横尾式部太夫の名が見え、横尾氏が本拠を持っていたようである。また、地頭の土師但馬守の鳥越名は蒲生谷の一番奥のつまりである。これらは、秀吉の因幡侵略より早く応仁文明の乱に参加没落したと云われる（『鳥取県史中世』）。『因幡志』には山名家の被官である安藤采女正（蒲生の半瀧城主）の名が出ており、蒲生谷一帯を支配したとあるが、秀吉侵攻の時没落したのかも知れない。

（おわりに）

『二上山城調査報告書』一九八〇

岩美町教育委員会・岩美町城趾調査委員会
があり、詳細な学術報告書である。

因幡守護名には見解の分れるところがある。熙貴は、本光寺の伝に、中務大輔とあるのでこれに依った。また『国史大辞典』山名氏の項も参考とした。（よしだ・まさひろ）

（元岩美町郷土文化研究会会長）

清和源氏と宇多源氏

佐々木定道

山名家は、五十六代の清和天皇を祖に戴く清和源氏である。佐々木家は五十九代宇多天皇を戴く宇多源氏である。清和天皇の祖父は五十四代仁明天皇であり、宇多天皇も仁明天皇の孫に当たる。即ち清和天皇と宇多天皇は又従兄弟同志であつた。清和天皇は元慶四年（西暦八七七年）三十一才で崩御せられ、宇多天皇は承平元年（西暦九三一年）六十五才で崩御された。これから計算すると清和天皇は西暦八四六年のお生れであり、宇多天皇は八六六年のお生れである。八六六年から八七七年までの十一年間はお二方共御健在だったことになる。

私の父方の祖父山名澄道は、鹿野の光輪寺から岩井の西法寺の養子になった人であり、母方の祖父佐々木楷定も、同じ光輪寺の出で、田後で寺小屋を開き後に田後小学校の初代校長を勤めた人である。その山名澄道と佐々木楷定は光輪寺十世智等の兄弟で、澄道が三男、楷定が五男である。

このように山名家と佐々木家は、清和天皇宇多天皇の頃から非常に近い関係に有り、又私自身としても、祖父山名澄道、佐々木楷定が兄弟であり、山名家佐々木家を身近に感ずる者である。

山名家は清和天皇から七代目の八幡太郎義

家の孫義重が新田の姓を名乗り、その子義範が上州山名郷に住みついて山名姓を名乗ったのが始まりで、その義範から十代目時氏が足利尊氏に従って後醍醐天皇を奉じて入洛したのである。その後時氏は足利義詮の信任を得、丹波・丹後・但馬・因幡・伯耆・隠岐・出雲・紀伊・和泉・美作・備後の十一ヶ国を領有し、六分之一殿と称せられた。時氏は応安四年（西暦一三七二年）七十三才で亡くなって居るから、一三〇〇年代の半が彼の最盛期であり、その頃、鳥取県は山名一族に支配されて居たことになる。

一方の佐々木家は宇多天皇から九代目、秀義が滋賀県の近江八幡に住んだ。近江八幡には古くから神社が有り、その神社に文治二年（西暦一一八六年）源頼朝が佐々木大明神という神号額を奉納して居る。秀義は元久元年（西暦一二〇四年）伊賀の平氏との戦で七十才で討死しているが、その子五人で近畿地方を分けて領有した。長男定綱が近江、二男

経高が淡路・阿波・土佐、三男盛綱が伊予・讃岐・上野、四男高綱が備前・安芸・周防・因幡・伯耆・出雲・日向を領有した。これから見ると西暦一二〇〇年代前半、因幡・伯耆は高綱が領有していた訳である。

これ等から、鳥取県は西暦一二〇〇年代前半は佐々木一族が、一三〇〇年代半ば以降、山名一族が支配していたことが分る。

山名家では時氏の三男氏冬が因幡を貰い、氏家・氏重・熙貴・勝豊・豊時・豊重・豊治・誠通・豊定・豊数・豊国と続き、天正八年（西暦一五八〇年）豊国の逝去により因幡山名は終っている。豊国は豊臣秀吉に攻められ、弱気であったため、家臣の家老達に嫌われ、鳥取城から追い出された。その後家老達は毛利に頼んで吉川経家を迎え、秀吉の兵糧攻めに耐えたが、袋川の丸山の住民達に裏切られ、食糧の搬入路を密告されて、遂に吉川経家は切腹し、鳥取城は落城した。

当初因幡の中心は東部で、山名時氏が西暦

一三四一年に、今の岩美町の岩常の二上山に城を築いた。中心は逐次西に移り、因幡山名六世の勝豊が湖山池湖畔の布施に天神山城を構築した。十世の誠通は自らは布施に居を構え、久松山に鳥取城を造り、重臣武田又五郎高信を定番とした。天正元年（西暦一五七二年）に山名豊国が鳥取城に入り、家老達に追われて城を出るまで豊国が居た。豊国の後は宮部継潤長秀が入り、慶長五年（西暦一六〇〇年）に池田家の所領となった。

つまる処、因幡伯耆は一二〇〇年代から、佐々木・山名・池田家の領有となり、明治維新の廃藩置県に依り、鳥取県となったものである。

山名一族の会報が発行されるに当り、一筆山名家と鳥取について述べ、その関連で佐々木家についても触れ、駄文を弄しました。御一読賜わらば幸甚です。

（ささき・さだみち）

備後国と神辺城

一、対明貿易と神辺の地

古代より備後の国の中心は神辺の北方に位置する府中であり、国府の所在地となっていた。しかし、中世以降、瀬戸内海運わけでも貿易の発展（東西方向）と山陽道から山陰道も結ぶ陸路の発展（南北方向）の交差する所として神辺は重視されるようになった。実際、室町政府は永享四年（一四三二）・幕府船一・山名船二・畠山・一色・細川などの大名船一・醍醐寺・大乘院などの寺院船一の計五隻を「天竜寺船」として貿易を開いている。こ

の中では、山名時熙公の代の正長元年に因島の村上水軍の村上備中入道に鞆の西にある因島の地頭職が与えられていることが注目される。

なお、鞆は瀬戸内海の上り下りの潮の東西合流地点にあり、潮の流れの変化を待つ必要もあり港として栄えていた。「天竜寺船」が出帆した尾道は院政時代以来の年貢の積出地であった。この対明貿易では主なものとして銅・硫黄等を輸出し、綿布を輸入していた。昭和三九年二月、木ノ庄町木梨では中国銭七五四五枚が発掘されたが、これも対明貿易とのかかわりであろう。

山名年浩

二、備後の国人層

室町時代には六十六の守護大名がいたが、その内訳は鎌倉公方管轄下の関東十ヶ国、九州探題管轄下の十一ヶ国と足利將軍の直接支配下にあつた、数ヶ国の守護を兼ねる者がいたことから、在京の大名は二十一名、二十二名と考えられる。このなかで、守護が強固な領国を上から形成した大内氏の周防・長門国

や管内の国人の自立性が強く守護の領国の形成を見ない安芸国のような両極の特徴を持つ国々があつたが、備後の国では勢力を張る国人層との協調や対立・統制の中でもかくも守護領国が形成されていた。備後の国人としては、山内氏・三吉氏・江田氏・和智氏・宮氏・杉原氏・渡辺氏・小早川氏らがいたが、山名時瀧公の代に内裏へ奉納する段銭や賦課を受けた国役を割当てた国人の一覧があるので紹介しておく。資料①参照。

資料①

康正二年造内裏段銭并国役引付（抜粋）

芸州沼田庄段銭	拾貫文	五月廿九日廿七日定	同	小早川備後守殿
備後国信敷庄段銭	九貫八百七十匁	五月廿九日廿六日定	送り状在請取出	等持寺領
備後一国之内段銭	五貫文	五月卅日	同	宮下総殿
備後国信敷庄段銭	拾貫文	五月卅日	同	宮下野守殿
備後国信敷庄段銭	一貫文	六月一日五月卅日定	同	宮彦二郎殿
備後国柞戸村且段銭	一貫文	六月一日五月卅日定	同前	大和兵庫助殿
備後国神石郡高光郷段銭	一貫文	六月一日二日定	同	宮五郎左衛門殿
備後国志厚利庄段銭	五貫文	六月七日	同	伊勢備後入道殿
芸州竹原段銭	三貫文	六月一日五日定	送り状在請取出	小早川安芸殿

備後国段銭	五貫文	六月十二日十一日定	同前	宮式部丞殿
備後国之内三ヶ所之段銭	拾貫文	六月十八日	同前	宮下野守
備後国十田村段銭	貳貫文	六月十八日十七日定	同前	宮彦二郎殿
備後国布野郡段銭	三貫貳百廿文	六月廿一日廿二日定	同前	大和弥九郎殿
備後国沼田庄段銭	三貫五百八十二文	六月廿一日	同前	三吉太郎殿
知行分段銭之内	拾貫文	六月廿一日廿日定	同前	小早川備後守殿
備後国草原村段銭	拾貫文	六月廿日十九日定	送り状在請取出	佐々木兵部少輔殿
備後国父木野四ヶ所分段銭	三貫文	六月廿三日廿日定	同前	杉原新藏人殿
備後国信敷名立（主歟）職段銭	九貫六百文	六月廿三日廿日定	同前	杉原美濃守殿
備後国木梨庄段銭	六貫五百七十九文	六月廿三日廿日定	同前	杉原因幡守殿
備後国三原浦井高州杜分	拾貳貫三百七十五文	六月廿三日廿日定	同前	杉原彦四郎殿
備後国杉原本庄段銭	八貫二百八十五文	六月廿三日廿日定	同前	杉原千代松丸殿
備後国所々七ヶ所段銭	五貫文	六月廿三日廿日定	同前	杉原左京亮殿
	貳拾貫文	六月廿五日	送り状在請取出	宮上野介殿

「群書類從第十八輯 雜」より

なお、これらの国人層は応仁の乱においては次のように立場を分けた。

西軍…三吉氏・山内氏・田総氏・江田氏・

和智氏（内郡）

東軍…渡辺氏・宮氏・杉原氏（外郡）

また、明応期の山名家の内訌においては、次のように分かれ対立した。

政豊・致豊軍…和智氏・三吉氏・江田氏（内郡）

俊豊軍 ……山内氏（外郡）

これらの分離対立は内陸部の内郡と沿岸部の外郡という地理的位置に基づく対抗からの影響が出ているといえる。特に、守護俊豊公の代には先代政豊公の時代より数々の軍功を

たてた山内氏（山内大和守、次郎親子）に對して多くの知行を与えている（『尾道市史』昭和四六年より）。資料②参照。

資料②

備州大田庄之内本郷賀地田西村三ヶ所事、今後忠節無比類候間相計候如先々可有知行候、次元藤事岩成ニ可立替之由候得其意候、公用事者如此間可有執沙汰候、張命丸可申遣候也、謹言

明応元年十二月五日

俊 豊 判

山内次郎四郎殿

（閩閱録一三ノ五）

備州信敷西分之内、敵令同意事跡事、同国永江庄（但本村除之）等事、但當給人於成敵者、為給分可有知行候也、

恐々謹言

明応貳年二月七日

俊 豊 判

山内大和寺殿

（閩閱録一三ノ五）

但馬国城崎郡篠岡庄之内（篠岡長門守跡）

備後国御調郡之内（三吉數名跡）七拾貫文

（三吉森光跡）貳拾五貫文（三吉池上跡）貳

拾五貫文等事、就於今度但州抽自余輩堪忍忠節、為恩賞之地所充行也、早守先例可致其沙汰之状如件。

明応二年五月十六日

俊 豊 判

（閩閱録一三ノ七）

高野領備後国世羅郡大田庄之内上原代官職事申付候、於公用者嚴重ニ可有取沙汰候、聊不可有無沙汰候、恐々、謹言

明応參年三月二日

俊 豊 判

山内大和寺殿

（閩閱録一三ノ五）

今度其方隱居之事、更以雖無覺悟候、我々所存知被分候ニよて如此之由被申候間、不及

是非候、殊以最前より別而京為中忠節無比類
候上者、聊非等閑之儀候、恐々謹言

十二月廿三日

俊 豊 判

山内大和寺殿

(閏閏録一三ノ五)

備後国播磨国所々知行并請地等事、任先例
旨領掌不可有相違候者也、恐々謹言

明応四年十一月廿二日

俊 豊 判

山内次郎四郎殿

(閏閏録一三ノ五)

備州大田庄内本郷同在所寺町分等事、相計
候可有知行候者也、恐々謹言

明応五年卯月三日

俊 豊 判

山内次郎四郎殿

(閏閏録一三ノ五)

(俊 豊)判

知行分所之所

一、田総領家之事

一、杭半済之事

一、津口地頭分之事

一、植田領家事

一、永江庄本村事

一、御調庄之内數名衆跡一円事

已上

明応五年拾月廿一日

(註) ——は俊豊公から山内氏へ与えられた

知行地名である)

三、神辺城主

備後の穀倉地帯である神辺城の周辺には二
十七の城があった(『神辺城の歴史』より)。
この内神辺城の城主の菩提寺とされる龍泉寺
が神辺城跡の尾根一つ東にあり、その『過去
帳』より築城から、神辺城が福山城に移築さ
れるまでの城主の一覧が明らかになった(以

下写真の①③参照。浅山備前守條就には
じまるこの一覽では、山名氏にかかわる人物
として「永雲入道大居士 山名近江入道丈休」
の名が出ています。この人物は『備後古城記』
では「持豊公の重臣であり嘉吉三年に神辺城
を修復した」と記載されている部分と符合す
る。

なお、続いて「山名宮内少輔忠興」の名が
出ており、この地では名高い武将であり少し
ふれておくことにします。杉原氏は平家を祖に
する備後東南部の有力な一族であり、足利尊
氏の西遷を機に足利將軍家に功を尽くすよう
になっている。杉原氏においてもその居城の
一つである、鷺尾山城の地（木の庄町木梨）
から多量の中国銭が出土していることから
貿易にかかわったと考えられる。しかし、後
に「山名」を名乗ったその由緒については不
明の点が多いが、幕末期の神辺の漢詩を中心
にした著名な学者、管茶山編になる『福山志
料・卷之二十九』の次の記述が大方を語って

いよう。

「山名全盛のときは姻族などのゆかりにつ
き、前代より山名を称しけれども、後に
大内に味方して山名を追出せしよりして
本姓に復せしなるべし。忠興が妻も山名
豊清が娘なり。かかる縁者なれば、真の
山名氏ならば大内が先陣の山名氏政を亡
ぼさんとは謀るまじ、山名強き時仮に称
せし山名氏なるべし」

杉原山名氏の由来についてはなお不明の点
が多いが、忠興を中心に神辺城については次
の文献が重要である。

村上正名 「神辺城」(『神辺町文化財シ

リーズ」 No 3 昭和四二年)

同 「神辺城」(『広島県文化財ニ

ユース」 No 47 昭和四五年)

田口義之 『備後の武將と山城』

(芦田川文庫 昭和六一年)

龍泉寺『過去帳』の神辺城歴代城主

浅山備前守條純（名實）顯廣王苗裔初ノ義治ト云フ

元弘之頃官軍ノ屬、後ノ備後國ノ守護職ヲ賜、建武二年乙亥神邊紅葉山城ヲ築、十一月廿六日入城ス

浅山次郎義基

浅山五郎義豊 家統又ハ義連

後山名ノ爲メ没落シ子孫岡防園山口城主大内家ニ家士トナル

永雲入道大居士

紅葉山城主山名近江入道文休殿
享徳二年癸酉四月十日命終

黒執院聖別義英秋光居士

出雲國尼子精入長臣黒新左衛門秋光殿紅葉山城主
山名宮内少輔忠興ノ平賀太郎左衛門隆宗合戦ノ時天文十九年
癸酉十月十五日當寺ニ於テ自害ス

忠興良勇大居士

紅葉山城主山名宮内少輔忠興殿
弘治三年丁巳三月五日命終

修進良補居士

細將少輔二郎殿永禄十二年八月三日
紅葉山ニ於テ命終ス

○数重寺殿前掛判大守大定宗廣大居士

西伯郡大高
杉原橋守盛重殿金御水

①

神邊紅葉山城主後伯耆國八橋城主岡地於テ卒去
天正九年辛巳十二月廿五日卒

岑芳善松居士

杉原左京進殿
天正八庚辰四月廿六日卒

本室理光大姉

杉原左京進殿奥方
天正八庚辰四月廿六日卒

花羽原春居士（長男）（守會）

杉原弥八郎元盛殿
天正十年壬午十月廿六日卒

凌雲院殿傑叟義秀大居士

大内左京大夫義興殿
享禄元年壬子十二月廿日卒

常樂寺殿華溪大居士

毛利備中守隆元殿
永禄五年戊申八月四日卒

義岳良勇禪門

義勇良光禪門

義道忠勇信士

城主杉原殿家臣馬屋原入道

永禄士年五月大日神邊紅葉山城代元

永禄士己二月大日神邊紅葉山城代元

城主杉原殿家臣所原勇

②

義山忠成信士

城主杉原殿家臣涌出原辰藏
永禄三年己未六月十日神邊紅葉山於
于戰死

義嚴證入信士

城主杉原殿家臣長田左京
永禄三年己未三月神邊紅葉山於戰死

大興義勇信士

城主杉原殿家臣前原忠雄
永禄三年己未三月神邊紅葉山於戰死

忠光貫信士

城主杉原殿家臣岡崎忠
永禄三年己未八月十日神邊紅葉山於戰死

忠岳良孝信士

城主杉原殿家臣渡辺政
永禄三年己未三月神邊紅葉山於戰死

忠山品義興信士

城主杉原殿家臣止原重藏
永禄三年己未八月十日神邊紅葉山於戰死

忠山良光信士

城主杉原殿家臣於戰死
永禄三年己未八月十日神邊紅葉山於戰死

前丹別清間道徹居士

廿三日命終

安藝國廣島之城上福島左衛門太夫正則之家老福島丹波殿
紅葉山城上三萬石慶長七年壬寅三月當寺 再建寺元當寺
中興之關基也

天真院殿仙領壽林大姉

廿五日命終

福島丹波殿與方

德勝院殿前日列大守參康宗休大居士

乙卯神邊城上水野日向守源勝成殿
慶長四年甲子十一月十五日平福山堅忠寺 葬

水野勝成公元和五年六月四日神邊紅葉山即入城了時御先祖

右御位牌 當寺約ナカリ位牌所ナリ給 其後寛永年中
右御位牌 福山西町泉龍寺 移給

③



管茶山の詩（同寺内）



龍泉寺

寺院との関係では、足利家の方は大田庄倉敷地としての尾道を食料貯蔵と兵站基地として扱い、納に安国寺を尾道の浄土寺内に利生塔を建て、深いかかわりをもったが、山名氏は院政七代の官寺である福山の西国寺を壇那寺として寄進などがかかわっていた。

〔註〕「西国寺再興御施主並寄付目録」の中には不明の人物として尾張守・源目寿丸が『尾道市史』で指摘されている。

四、備後国の守護

神辺城は室町前期には守護代の居城であった。守護代は時熙公・持豊公の代には太田垣氏が、政豊公の代には宮田教言が、俊豊公の代には山内二郎直通がその任に当たっていた。以下、備後守護職の次第を見るが、時義公から時熙公までの一〇年七ヶ月と時熙公の再任から祐豊公までの一三七年五ヶ月の合わせて約一五〇年間山名一族が守護となっていた。

なお、守護職をたどるだけでも、各研究者によって人名や就任・罷免の年月が異なる。そこで、ここでは地元での年来の研究をまとめた青木茂編『尾道市史』（昭和四六年）を基本にし、近年の研究である佐藤進一著『室町幕府守護制度の研究（下）』（東京大学出版会（昭和六二年））をそえて書き込む事にした〔※印の部分〕。資料③参照。

（結び）

山名氏の備後の国へのかかわりは誠に深いことが明らかになった。その動機や原因が地理的・経済的条件にあったことは推察できるが、そのより広く深い分析は今後の課題としたい。

氏名	官位	系統	就任	罷免
朝山嘉住 (※右の項全て記載なし) 朝山景連	出雲守 次郎左衛門尉肥前守	姓大伴、嘉国男 同上、嘉住弟	元弘三年 建武二年十一月 (※建武三年五月) 暦応元年十一月 暦応二年八月 暦応三年	建武二年十一月 暦応三年 建武五年三月
(※仁木義春 ※石橋和義 細川頼春	刑部大輔讃岐守	姓清和源氏公頼男	暦応三年 暦応四年 (※暦応四年) 貞和五年四月 貞和五年十月 観応元年六月 観応二年六月 観応二年八月 文和四年 貞治年中 応安四年三月 康暦元年 永和四年七月 康応元年八月 康応元年五月没 明德元年三月 明德元年三月	観応二年 貞和五年三月 貞和五年十月 観応元年六月 観応二年二月 観応二年八月 文和四年 貞治年中 応安四年三月 康暦元年 永和四年七月 康応元年八月 康応元年五月没 明德元年三月 明德元年三月
(※足利直冬 ※大平義尚 ※高師案 ※上杉頭能 岩松頼宥 (※細川頼之 洪川義行 今川了俊	民部大輔禪師房 右馬頭武蔵守 武蔵守 伊予守	岩松政経次男 頼春嫡子 直行子 範国次子	延文元年三月 貞治五年頃 応安四年三月 (※応安四年二月) 康暦元年八月	貞治年中 應安四年三月 康暦元年 永和四年七月 康応元年八月 康応元年五月没 明德元年三月 明德元年三月
(※山名義熙 山名時熙	彈正少弼伊予守 (※北朝備後守 伊豆守 宮内少輔右衛門督	時氏子、師義養子 師義子 時義嫡子	康応元年五月 康応元年八月	康応元年五月 康応元年八月

細川頼之 細川基之	山名時熙 山名持豊 (※山名是豊 山名政豊 山名俊豊 山名致豊 山名誠豊 山名祐豊 大内義隆 尼子晴久 毛利隆元
(再任) 兵部大輔阿波守	(再任) 彈正少弼右衛門督 彈正少弼 彈正少弼 彈正少弼 彈正少弼 彈正忠左衛門佐 右衛門督 右京大夫・中納言兵部卿 修理大夫民部大輔 備中守
細川満之長子	時熙子 持豊二男・熙貴養子 教豊子、持豊養子 政豊二男 政豊三男 政豊子、致豊養子 致豊子 義興子 経久子 元就子
明德元年三月 明德二年四月 (※明德三年三月) 応永八年二月 永享五年八月 応仁二年三月 文明四年八月 長享二年十月 明応八年正月 永正九年十月 享祿元年三月 天文七年七月 天文廿一年六月 永祿五年八月	明德二年四月 応永八年二月 永享五年八月 文明四年八月 文明七年四月 長享二年十月 明応七年 永正九年十月 享祿元年三月 天文七年七月 天文廿年九月 永祿三年十一月 永祿六年八月

(やまな・としひろ)

山名氏の光と影

— 山名宗全について —

太田 順三

昨年のNHK大河ドラマは、日野富子（少女時代を松たか子、成人後は三田佳子が扮した）を主人公とする「花の乱」であった。八

代將軍、足利義政夫妻を縦糸に、西軍の將山名宗全、東軍の將細川勝元等を横糸に配し、応仁の乱の綾織を織りなす人間活劇の壮大な歴史ドラマを再現してみせしてくれ、充分見ごたえのあるものであった。とりわけ萬屋錦之介が好演した禿頭姿の宗全の縦横無尽の活躍は深い印象となつてわれわれ視聴者の脳裏に焼きついて残っている。山名宗全像を直接映像に写し出したと思われる画像の伝存は今日

知られていない。わずかに絵草子に残る想像画が伝わるのみである。

ところで応仁の大乱に東軍の細川勝元と対抗した山名宗全（持豊）が、どのような経過で西軍の総帥として君臨するに至ったか。

『赤入道』宗全

「天下二肩ヲナラブル人稀也」（『応仁別記』）といわれた実力者の宗全は、多血質タイプあだなの風貌の故か、剃髪出家後は「赤入道」と渾名された。

兵庫県朝来郡朝来町の鷲原寺に、宗全が納めたという十二天の画像（口絵写真参照）が近年発見された。各図の裏に宗全の署名と花押を据えており、平素の信仰が伺える。

大徳寺の一休宗純が「業は修羅に属し名は山に属す」として、宗全を鞍馬の毘沙門天の化身と賦した狂詩（『狂雲集』）で、宗全の赤顔の風貌をとらえ、修羅の如く好戦的なのは毘沙門天の生れ変わりであると風刺したが、宗全自身、日頃から十二天を尊崇していたことは見逃せない。十二天のうち、毘沙門天は北を守護する軍神であって、北国の但馬を本国として威勢を誇った宗全の化身として似つかわしい。さきの想像画もこの毘沙門天をアナロジイして描いたものかもしれない。

山名持豊は『但馬村岡山名家譜』によれば、山名時熙（常熙）三男で応永十一年（一四〇四）五月二十九日に誕生した。幼名を小次郎といい、母は伯父にあたる「右衛門佐師義乃女」と伝えられる。しかし、この『家譜』は

江戸時代の編纂であり、持豊の母親を知るものとも確実な史料は、瑞岩龍惺の詩文集『蟬庵稿』に、持豊が亡母十七回忌を行った時の拈香の引用がある。これには、「安清開基無染太郎姉十七年忌、山名金吾母、奥州女」とみえる。

持豊の母は明徳の乱で知られる山名氏清の娘である安栖無染であって、彼女が父時熙の正妻であったことは『前南禅瑞岩禪師行道記』にも「無染氏清之女、而其宗巨川公（山名時熙）夫人也」とある。（詳しくは片岡懶樹氏「守護山名氏とその但馬の在所について」兵庫史学68号参照）

応永二十年（一四一三）正月、数えの十歳になった彼は元服して、將軍義持の偏諱を受け持豊を名乗る。幕府における山名氏の勢力抬頭の道程は決して平坦なものではなく、幾度にもわたって屈曲に満ちた局面をくぐり抜けたものであった。

六分の一家衆

清和源氏の流れをくむとはいえ、山名氏は細川・斯波・渋川・吉良らの足利一門の有力守護大名とは異なり、新田氏の庶流の出自である。新田義重の子、義範が上野国多胡郡山名郷（群馬県高崎市）に住し山名三郎と称したといい、義範を遠祖としている。高崎市山名町の山名八幡宮には山名氏発生の地の祖神として崇敬し、時氏から宗全に至る代々の家督相続者が寄進状などを寄せている。

今川了俊の著した『難太平記』に、義範から八代目にあたる時氏の言として「我建武以来は当御代の御かげにて人となりぬれば、元弘以往はただ民百性（姓）のごとくにて上野の山名といふ所より出侍りしかば、渡世のかなしさも身の程も知にき。又は軍の難儀をも思ひしりにき」と伝える。

山名時氏は、元弘・建武の乱が起ると、本

家の新田義貞には従わず、足利尊氏・直義に属して転戦、辛苦の様相がよく語られている。父政氏の妻が上杉重房の娘で時氏の生母である。この重房の子頼重の娘、清子が足利尊氏直義兄弟の生母でもあった関係から、股肱の臣となった重能の誘いに従い、尊氏の部将として活躍したものであろうか。

時氏は、建武四年（一三三七）名和氏を追討して伯耆の守護職を得る。さらに丹波・若狭を加えて三か国の守護を兼ね、また侍所頭人の職につくなど、山名氏抬頭の基礎を築いた人物である。

しかし、観応の擾乱の勃発によって幕府内部の勢力対立が激化すると、時氏は、尊氏と対立して直義方に転じた。直義が鎌倉で殺害されると、彼の養子直冬を擁立して南朝に帰順、本国とした伯耆を中心に出雲・隠岐・因幡を実力で討ち従えて幕府に反抗し、山陰道一帯に勢力の浸透をはかった。

貞治二年（一三六三）九月、直冬の退勢が

備後・安芸方面で濃厚になると五か国守護を条件に將軍義詮に服属する。そして、改めて幕府から丹波・丹後・因幡・伯耆・美作の守護に任ぜられた。

さらに、引付方頭人となって幕府に重用されたため、人々は「多く所領ヲ持タント思

ハゞ、只御敵ニコソ成ベカリケレ」（『太平記』）と羨んだという。

時氏没後、山名氏の威勢は衰えず、その後も但馬や紀伊・和泉のほか、康暦の政変後には備後と出雲・隠岐を加えた。また、侍所頭人兼帯の山城を加えるなど、一門は十二か国

分国の変化

出来事	守護	父	分国名
時義死去時点 (1389)	時義	時氏	但馬・伯耆・備後
	義理	時氏	美作・紀伊
	氏清	時氏	山城・和泉・丹波
	満幸	師義	丹後・出雲・隠岐
	氏家	氏冬	因幡
明徳の乱後 (1391)	時熙	時義	但馬
	氏之	師義	伯耆
	氏家	氏冬	因幡
嘉吉の変後 (1441)	持豊	時熙	但馬・播磨・備後・安芸
	教之	熙之	伯耆・備前
	教清	義清	石見・美作
	勝豊	熙貴	因幡
応仁の乱後 (1473)	政之	豊之	伯耆
	政清	教清	石見
	是豊	持豊	山城・備後・安芸
	勝豊	熙貴	因幡
戦国末期 (1557)	祐豊	誠豊	但馬
	豊国	豊定	因幡

日本全国六十六か国のうち山名氏は六分の一を支配して六分の一衆と称された
最後に残った因幡・但馬の拠点を奪ったのは秀吉だった

の守護分国に及んだ。

その時点で、日本全国の六十六か国のうち、六分の一を超えたことから、世に、「六分の一の家衆」と称され、山名氏は有力守護大名として幕府に威容を現した。

一門の統括権を掌握

山名氏の威勢が強大化し、その版図が山陰から備後・和泉・紀伊と、山陽から瀬戸内海の要地に伸びると、大内・細川氏の勢力圏と接触する。とりわけ、讃岐・阿波・淡路・摂津を回復して、分国として握る前管領の細川頼之は、山名氏の勢力抬頭に脅威を持った。

そこで、有力守護大名を抑圧して將軍権力の強化をめざす義満と謀って、山名氏の勢力削減を狙ったため、明德の乱が起こった。

康応元年（一三八九）五月、時氏嫡子師義から惣領職を継いだ時義（時氏五子）が死去し、時義の嫡子時熙が家督を継ぐと、惣領権

をめぐって、山名一族の内紛が起る。

これを巧みにとらえた將軍義満は明德元年（一二九〇）三月、時熙・氏幸（師義の子で満幸の兄、時義の養子）兄弟が幕命に従わないとして、惣領職を狙う満幸・氏清（時氏四子）に討たせた。但馬から備後に時熙らが敗走すると、その分国但馬を氏清に、備後を細川頼之に、さらに氏幸の伯耆・隠岐を満幸にそれぞれ付与して、一門の分裂抗争をはかった。しかし、翌二年になると義満は一転して、勢いづいた満幸・氏清らを幕府へ反逆させるように仕組んで、時熙らを赦免し挑発した。

分国出雲の仙洞領横田莊を押領したことを理由に京都を追放された満幸は、和泉の堺に拠る舅氏清しゅうとと謀叛を計画した。氏清は、満幸と兄の紀伊守護山名義理や因幡守護の甥氏家を誘い、和泉に挙兵して京都に進撃した。

しかし、たちまち待ち構えた細川頼之・畠山基国や義満の馬廻衆など、幕府の大軍のため京都の内野に敗北した。氏清は戦死し、

満幸・氏家・義理らは敗走した。

山名の分国は但馬を時熙、伯耆を氏幸、そしてのちに許された氏家の因幡の三か国に削減されて、「六分の一家衆」を誇った山名氏の威勢は一朝にして瓦解してしまった。

かくて分国の縮小により弱小化した山名氏再興の願いは、からくも但馬守護となり山名の総領家として、幕府に出仕することで命脈を保つことになった山名時熙（常熙）や、子の持豊の双肩に委ねられることとなる。時熙は義満に近侍し幕府に奉公を励む。

大内義弘は、明徳の乱で山名氏から紀伊・和泉を得て、防長・石見・豊前など六か国の分国を併吞して抬頭し、瀬戸内海の東西両端を押さえ、海外貿易にもかかわり強大化する。その義弘が、応永六年（一三九九）一〇月に大軍を率いて和泉堺に入り、専制君主義満に叛乱する。

この時、丹波で氏清の嫡子宮田時清も義弘に呼応して蜂起した。時熙は一族満氏（氏清

次子）らと丹波に出陣し、国人久下・中沢氏らを結集して時清らを鎮圧し、次いで堺に籠城する義弘を攻めて戦功をあげる。

この応永の乱によって、時熙は備後守護を回復し、一族の氏利の石見、同満氏の將軍領国安芸守護代を加えて勢力の挽回の契機をつかみ一門の立て直しをはかった。

その後も時熙は在京し幕閣にあつて地位向上をはかり、相伴衆として幕府の枢要に参画する。応永二十一年（一四一四）には侍所頭人となり、將軍義持・義教に重んぜられ、宿老として重臣会議に列席する地位を得るに至る。

永享四年（一四三二）に再び侍所頭人を務め、翌年には仁木氏に代つて伊賀国守護が付与され、一門の分国は七か国を占め、勢力抬頭の地盤を再び構築することとなった。

三男持豊は、同五年八月に父時熙から家督を譲与され、將軍義教から本国但馬・伊賀・備後・安芸四か国の守護職兼帯を承認される。

長兄満時が早世し、次兄持熙が嫡子として幕府に出仕し五番衆に加えられていたが、二年前に義教から怠慢を理由に出仕を停められ、父時熙に廃嫡とされていた。

敬白

奉啓上但馬(一宮)石神社(主)大明神(主)

右當家久任當國守護職並兼校尉
一門榮耀拔群累代忠烈越傳三茲
侍豊局奉奉德父祖重代蹤跡備親
疎校軍前頭是則所以
神明擁護令世不可不奉承
敬唯旦暮而致祈念天下泰平國中
是鏡也己者標社僧神官小僧致行
無懈節々礼煩不退者也於感其外
感感及子孫之慶其信心必生
世々以懸念々自勉也

永享九年(一四三三)七月四日

山名宗全自筆願文

永享七年(一四三五)七月四日、時熙が六十九歳で波瀾の生涯を閉じる。持豊は翌年八月但馬一宮に願文(上段写真参照)を納め、「自分は父祖重代の蹤跡(しょうせき)を継ぎ、親族数輩の首頭に立つが、神明の加護を憑(たの)んで全うしたい」(『出石神社文書』)と、強い決意で山名一門の統轄の重責を荷なうことを述べている。『經覺私要鈔』に「京都に物念これ在り、山名刑部少輔(持熙)上洛すべきの由、企てこれ在り」と持熙が家督を求めて上洛のことを伝えているから持豊の危機意識は相当のものであったとみられる。

翌永享九年(一四三七)九月、持豊の家督相続を不満とした持熙が備後に挙兵し、国府城を奪つて叛乱する。持豊は、これを攻めて敗死させ、山名氏の総領家の地位を確実なものとし、一門の統轄権を握った。

山門嗽訴(ごうそ)事件が起ると、將軍義教の命を受けて山門攻撃に出陣する。また、大和永享乱には越智・箸尾氏らの拠る多武峯を攻めて陥

落させて武名をあげる。永享一二年（一四四〇）には、侍所頭人に赤松満祐に代って任ぜられ、御相伴衆としての幕府での地位を占めるに至った。

勝元との確執から大乱へ

翌嘉吉元年（一四四一）六月、義教が赤松邸で満祐らに暗殺され、嘉吉の変が起る。混乱のなか追討の軍編成が遅れるが、持豊は侍所頭人として遠征軍の総司令官となり、頭人を京極持清に交替する。搦手^{かぎめて}として主力軍を率いて、但馬から真弓峠を突破して播磨に出兵。坂本城を攻略し、さらに城ノ山城に逃れて抗戦する満祐らを攻めて自殺に追い込んだ。

赤松氏の討滅という嘉吉の乱に大功のあった持豊には、赤松一族の赤松播磨守満政に与えられた東三郡の分郡を除く播磨の守護職が、備前・美作も一族の教之・教清に付与される。山名一門の分国は、但馬・因幡・伯耆・岩

美・播磨・美作・備前・備後・安芸・伊賀の一〇か国となった。このうち持豊は美作・備前を除く八か国を独占して、地盤を固め、彼の一族内の統轄権は一段と強固なものとなる。また、安芸・備後・備前・播磨と瀬戸内海沿岸の分国を大きく増大させたことは、阿波・讃岐・淡路・摂津・備中・和泉など沿岸分国の要衝を押え、管領家として幕閣を主導する細川氏に対抗し得る有力守護家に山名持豊をのし上げることとなった。

応永の乱後、一時勢力を弱めた大内氏が北部九州を平定し、博多を扼^{くわ}す筑前を有して、瀬戸内制海権の争奪に再び細川氏と覇を競うようになる。

持豊は嘉吉三年（一四四三）六月、將軍の近習として義教とともに横死した前石見守護山名熙貴の娘を猶子として、九州にあった大内持世養嗣子教弘に嫁がせ、大内氏と提携を結んだ。

一方、幕閣に復帰して権勢を強めた畠山持

国（徳本）が、主導権をめぐって細川氏と対立を深めていた。持豊は文安四年（一四四七）二月に、同じく猶子とした熙貴の娘を若年の管領勝元に嫁がせ、政略婚を通じて細川氏との同盟を成立させた。そうして、中央政界での持国追いつ落としをはかって政治力の伸長を強めていったのである。

宝徳二年（一四五〇）には、家督を嫡子教豊に譲り、自らは剃髪・出家して宗全と号した。しかし、幕府内での専横な振舞いから反感を買うことが多かった。

その結果、享徳三年（一四四五）十月、勝元の一族成之が、赤松満祐の甥則尚の幕府出仕を謀ったことがもとで、宗全は將軍義政から追討を受ける立場となった。この時は勝元が宗全の婿として仲介し赦免されたが、宗全は但馬帰国と隠居を命じられ、嫡子の教豊が跡を継ぐことになった。豊岡・小田井神社の贈呈の返礼を述べた山名宗全書状この頃のものであろう。

則尚が播磨に下向して赤松殘党を集め、山名致豊（宗全嫡孫）を攻めて勢力の回復をめざすと、宗全は但馬から出兵してこれを排除した。

隠居は形式にすぎず、宗全は政治への関与を相変わらず続けた。そして、長祿二年（一四五八）幕府の赦免を受けて上洛し、細川勝元に拮抗できる幕閣の実力者として、前にも増して専横を極めるようになった。

満祐の弟である義雅の孫、次郎法師丸が、勝元らの支援で出仕し、將軍義政の偏諱を受けて政則と名乗り、赤松家再興を幕府から許されると、宗全と勝元との間に決定的な対立の溝を深めた。幕閣に主導権を誇る勝元に対抗し、他を圧倒して実力を誇示する宗全は、一方の首領として幕政の表舞台に頭角を現わすようになる。

管領家である斯波・畠山氏の家督争いで、勝元が斯波義敏を援助すると、宗全は細川氏から迎えた同義廉に娘を婚約させて援助した。

また、勝元が畠山政長を支援すれば、宗全は義就を支持、両畠山は河内・大和で衝突を繰り返した。

政所執事伊勢貞親、蔭涼軒主季瓊真薬ら將軍側近グループは、義政の將軍権力を背景に斯波氏の家督に介入し、義敏家督相続、義廉の宗全の娘との婚姻破棄と出仕停止を謀った。さらに、義政の正妻富子の生んだ義尚の將軍位後継をはかって勝元補佐の義視の暗殺を狙い、巧妙に勝元・宗全の両勢力を牽制して政治介入し、権勢拡大をはかろうとした。

文正五年（一四六六）九月、彼等は勝元・宗全双方の反撃で幕府から追放される。この文正の政変直後に義尚を抱える日野富子とその兄勝光らは、後援者貞親を失ったため、宗全を頼った。これにより、潜行していた宗全・勝元の両者の対立は一挙に表面化し、激化した。

宗全は、姉の尼僧安清院を富子のもとに遣わし、富子を通じて義政に畠山義就を赦免さ

せ、義就を上洛させた。明けて応仁元年の新年を迎えると、一触即発の情勢のなかで宗全はさっそく義政に迫って勝元派の畠山政長の管領職を奪った。そして、それに自派の斯波義廉を据え、義視を強制的に幕府に移した。

失脚した政長は正月一七日夜自邸に火をかけ、勝元の支援をあてにして、京都上御霊社に陣を取った。宗全派のクーデターによって、將軍義政・義視をはじめ、天皇・上皇まで押さえられた勝元は、軽々には動けず、結局孤立した政長は正月一八日陣を開き京を退いた。畠山両派の激突を引き金として、宗全・勝元それぞれの陣営は両派の与党の諸將を各地から集める。そして、五月二十六日ついに両軍は応仁の大乱へと突入していった。

（学研『応仁の乱』に発表の

原稿を一部改稿して転写）

（おおた・じゅんぞう 専修大学教授）

安田元久先生のご逝去を悼む

山 名 章

平成六年夏、全国山名氏一族会の相談役としてお迎えした元学習院大学学長で同大名誉教授の安田元久先生ご夫妻が今年一月二十三日未明、自宅火災により亡くられました。

その日のどの夕刊も二〇〇平方糎米程度のスペースで記事にし、先生の顔写真を載せて報道していました。

記事を読むと、火災の原因は一階トイレと風呂場の間の壁に埋め込まれた配線からの漏電とあり、奥様は廊下で。軽い脳溢血で体調を崩していた先生は消防隊員に救出されたが火傷のため病院に運ばれて間もなく亡くなったとのこと。まことに不運としか言いようのない痛恨の極み

の出来事で、暫くは茫然自失の私でした。

平成六年五月の一族会総会のとき会員の山名規之氏から次の提案をいただきました。「私が仕事の関係からお付合している大学教授の奥さんの義兄に学習院大の学長をした方で数年前に大学を退き、今はお家におられる方がいて、専門が日本中世史で皇太子殿下のゼミ担当教授として卒論指導をされたと聞いたので、奥さんに全国山名氏一族会や史料調査研究会のことをお話し、会誌に中世山名のことを書いて頂きたいので奥さんから安田先生に紹介して下さいとお願いしたら、奥さんは、東京の姉を通して頼んで上げますから安田を訪ねてみたらどうですか

と仰言るので、東京に帰ったらご一緒に安田先生をお訪ねしましょう」ということでした。

これは願ってもない有難いことと思ひ帰京して七日目の六月五日日曜日の午後、私達二人は世田谷区松原六丁目の閑静な住宅地にあるお宅に伺いました。

広い応接間に通されるとウールの長袖シャツ姿の先生はすくくと立ち上がり規之さんに「妹一家がいろいろお世話になっているそうで」丁寧にお礼を述べられました。

早速訪問の趣意を申し上げ持参した『山名家譜』『山名豊国』『山名常熙と禅利』の書籍と会誌『山名』『山名、赤松研究ノート』を差し上げますと暫く無言でページをめくり、やがて顔を上げられ「山名会はなか／＼立派にやっておられる。会誌に永島先生が書いておられるが先生とはどういうご縁ですか」と仰言る。奥様も会誌を見て「まあ永島福太郎先生ですね。懐かしいお名前です」と、明るい声をあげられ「私、永い間史料編纂所に勤めていたので永島

先生はよく存じ上げています。編纂所によくお越しになりました。お年でしようが奈良でお元気にしておられるのでしょうか」とお話に加わって下さったので話題も広がり、謹厳で古武士の風格を思わせる先生も微笑を含んだ表情で私達の話に応じて下さり、ご先祖安田義定のこと―甲斐源氏として頼朝政権樹立に協力した功績で駿河、遠江の国司兼守護になったが頼朝とは距離をとり同盟的存在であり続けたため、謀叛計画ありと梶原に讒言され親子共滅ぼされたと、鎌倉幕府の有力源氏排除政策の話をして下さいました。四方山話も尽きず予定した訪問時間が一時間以上も超過したところで辞去しようとする、先生は「相談役の方はお引き受けしなう。執筆の方はどういうテーマを選ぶかについて考える時間を少し下さい」と仰言いました。

訪問から数年後、規之さんから先生が軽い脳出血で入院されたと聞き、あわててお見舞に伺い、奥様から半身は不自由ですが頭の方は幸い支障なくリハビリに励んでいますとのこと。昨

年暮には、皇太子様も参加される恒例のゼミ新年会も自宅で開ける見通しとお聞きし喜んでいたのに、その新年会のあと、このような事故で逝ってしまわれるとは……。二月二十九日の千日谷会堂での告別式で献花し乍らも口惜しくくなりませんでした。会堂には先生の愛唱歌「青葉の笛」と「惜別の歌」が流れていました。

今はただ会員の皆様と共に先生のご冥福をお祈りするばかりです。

(山名氏一族会会員)

垣屋三武將の

武者絵掛軸について

山 名 章

山名家臣団の四天王に、垣屋、太田垣、八木、田結庄の四家がある。その筆頭に垣屋氏が挙げられるのは、垣屋氏が但馬以前からの山名家臣であるのに対し、他は山名が但馬入国の後に臣従した人達だからである。垣屋も山名家の大黒柱としての存在を自他ともに認めていたようである。

本誌巻頭に口絵写真として載せた軸装の武将画像は、鳥取県岩美町の桐山城に居た垣屋氏の子孫が所持していたものを、岩美高校の教諭で『鳥取県史』の編纂の執筆者として参加した郷土史研究家の吉田政博氏が昭和六十一年に発見

し、損傷と汚れを除き、友人の表具師と相談して表装を改めた上で半切写真に撮り、系図と一緒に県立博物館に寄贈し保存を図ると共に、手元に写真、系図、家伝記、家筋書上のコピーを保管し、さらに親しい同好の研究家にこの写真を贈られた。その中のお一人が当一族会相談役で、兵庫県浜坂町文化財審議委員長の山本茂信氏でした。この度の会誌の口絵として同氏所蔵の写真を提供願った次第です。

掛軸の垣屋三武將は、その子孫が一族の絵師垣屋春蝶に描かせ、三社八幡宮として崇め祀ったもので、それぞれの法名が画像の上部に記さ

垣屋三武將の法名

れている。

先ず三武

將を系図で

確認した。

垣屋氏の系

は大変わか

りにくいの

で『校補但

馬考』並び

に橋本五雄氏の『因幡垣屋系図』による。

垣屋氏は、垣武天皇曾孫平高望に出て九代の

孫垣屋次郎忠法が上州沼田城主で垣屋の祖、五

代にして上総に移り、十四代伯耆守重教が山名

時氏に従い但馬に來住、亀ヶ崎城（豊岡市）に

居て但馬垣谷初代となる。その子時忠は將軍足

利義滿が管領細川頼之と仕組んだ山名家潰しの

「明德の乱」に京都大宮の戦で敵十四五騎に取

り籠られ、危く討たれようとした山名時熙に駆

せ塞がつて討死し、主君を脱出させた。その凄

絶な最後のさまは敵味方の別なく感動させたと

『明德記』は言う。

三代隆国

法名 隆国寺殿一関宗無大禪定門

播磨守

楽々前城主

少年期、明德の合戦で父弾正を失う。長じて

山名一族総領家の執事として守護山名時熙を扶

け、但馬における垣屋家隆盛の礎を築く。

時熙は、將軍義滿の方策に従い、応永の乱で

堺城に大内義弘を討ち、よく分国統治につとめ

室町幕府の最盛期実現に貢献、その晩年、義持

の大御所政治から義教の代には『当期の一老』

と称されて管領家を凌ぐに至り幕政のほとんど

は時熙の意向に左右されると言ってよい程の状

態をもたらした。

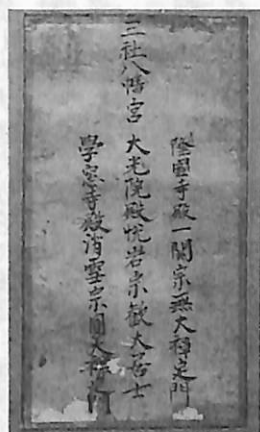
隆国について家伝記は「山名家四天王、随一

ナリ、山名右衛門督持豊時代 同国楽々前城主

ナリ、但州ハ云ニ及ハス近国マデモ山名ニ媚ヘ

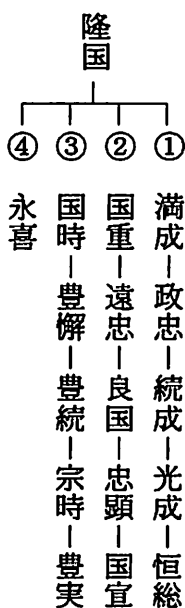
ツロウモノ此ノ隆国ヲ怖レテナリ 数度ノ合戦

利ヲ得スト謂フコトナシ マタ家 分レテ鼎



の如シ」という。

隆国以降の略系は次の通りである。



四代満成

備前守 案々前城主 山名宗全（持豊）に従い「嘉吉の乱」に出陣、播磨守護代となり、「応仁の乱」には嫡子政忠、弟父子国重（宵田城主）遠忠、国時（轟城主）豊懈に一族を率いさせて参陣。乱終結のときには使者をつとめ文明六年四月三日講和成立の日に、山名政豊、同一族の官田備後守と共に細川政元邸を訪れている。宝暦元年金山村（日高町）に布金山隆国寺を建立し父隆国を祀り一族の菩提寺とした。

五代政忠は、宗全、政豊に従い屢々出陣、文明十五年三月蔭木城で赤松政則軍と戦い戦死。

六代統成は、永正九年鶴ヶ峯に亀崎城を築いて移る。元亀元年岩井村養寿院で四天王の一人、田結庄是義に囲まれ自害する。

七代光成

法名 大光院殿悦岩宗歆大居士

播磨守 鶴ヶ峯城主 桐山城主 豊臣時代、

因州巨濃郡一万石

天正三年十月鶴城（豊岡市）の田結庄是義を討って父の遺恨を晴し、但馬の穀倉地帯城崎郡を領知。この時代足利幕府既に滅び、但馬守護家は政豊の播磨回復も成らず、致豊、誠豊を経て祐豊が守護となる。所謂「但伯因の乱」で山名一族の惣領家但馬山名よりの離脱と、その支配体制は崩壊の危機に瀕していた。但馬の情勢は、朝来郡竹田城に拠る太田垣氏、養父郡八木城の八木氏、気多、城崎の二郡を領知する鶴ヶ峯城の垣屋光成及び但馬中央部の出石郡一帯に君臨するだけの守護祐豊の四大勢力に分れ、中でも垣屋氏の威勢は守護祐豊を凌駕したとも言

われる。

山名の没落を決定的にしたものは尼子、毛利・織田といった新興の戦国大名達であった。尼子氏は毛利氏に滅ぼされ、毛利、織田両氏が山名氏の分国を侵略し始める。

祐豊は迫り来る両氏の二大勢力に対し、甥の豊国と共に巧妙な外交策を展開し分国内の統一を図らんとした。

織田信長の天下統一が緒に就き將軍足利義昭を奉じて入洛する準備を整えた頃の永禄十一年（一五六六）毛利元就は、自らの中国制覇の野望を秘め、当面の障害となっている但馬の山名祐豊を連携して滅ぼそうと信長に接近を策した。『銀山日記』によれば、天文十一年（一五四二）初めて鉱石を掘り出し、今は本格的に採鉱を続け祐豊の「因幡戦争」を支えている生野銀山が、信長の眼に好餌と映らぬ筈はなく、信長は、元就の要請に応える形で、秀吉、坂井政尚等に伊丹衆、池田衆の兵二万をつけて全年八月但馬に出兵させた。

織田軍は、わずか二週間の電撃戦で山名の本城である比隅山城、垣屋の諸城等十八城を落城させ、生野銀山も完全に制圧してしまった。この電撃作戦の成功は、一に鉄砲隊の威力によるものといわれる。祐豊は、和泉界に出奔し、信長の御用商人の斡旋で同年冬に帰国が実現したが、帰国後の祐豊の権威は全く失われたことは言うまでもない。

天正四年毛利氏が足利義昭の命を捧じ織田氏との開戦を決定すると信長は、羽柴秀吉を中国攻撃軍の総司令官に任命、織田と毛利両氏の対決が始まる。当時の但馬では親・織田派が垣屋光成、山名祐豊で、親・毛利派は八木豊信、太田垣輝信、垣屋豊統（前出略系の③）であった。

天正五年（一五七七）十月羽柴秀吉は播磨姫路城を中国経略の根拠として活動を開始、十一月但馬に進行し親・毛利派を攻撃、太田垣氏の竹田城を攻略し弟秀長を城代とする。然しこの度の但馬出兵は、播磨上月城が毛利に寝返ったので急拠但馬から撤兵、竹田城は太田垣氏に復す

る。

天正八年（一五八〇）一月秀吉は三木城を落し別所長治を自殺させ、毛利の中国防衛線が備中に後退すると一挙に但馬平定の軍を進め、三月から五月上旬迄に一応平定する。出石城は五月十六日に落城、山名氏政は出石城を棄て因幡に移り、父の祐豊はその五日後病死し、但馬山名氏は滅亡する。

垣屋光成と八木豊信は秀吉に降り、鳥取城の攻略に加わる。光成は早くから親織田派であった上、山名四天王としての力量を認められ、鳥取城攻略後、因幡、但馬境目の城として重視された桐山城主に登用され因州巨濃郡高一万石の大名に封じられた。

八代恒総

法名 学窓寺殿消雪宗圓大禅定門

隠岐守 桐山城主 豊臣時代 因州巨濃郡

高一万石

豊臣秀吉に仕え、文禄元年（一五九二）の征

明軍として部下四百人を率い朝鮮に出兵する。

慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の役には豊臣秀頼方に味方して出陣、大津城を攻撃したが西軍敗れるに及び十月三日高野山連華谷仏心院で弟政氏、忠次と共に自害した。

なお、孫の吉綱は元和元年徳川家康に召出されて紀州家臣となり、子孫は同藩上級藩士として存続した。（山名氏一族会会員）

（付記）画像の垣屋三武将の紹介を試みるに当り手許に資料が乏しかったので「岩美町郷土文化研究第四集」に吉田政博氏が執筆掲載された「一万石の領主垣屋氏のこと」を資料として使わせて頂きました。

執筆者紹介（敬称略）



太田順三

専修大学文学部教授
山名氏一族会相談役



佐々木定道

山名氏一族会顧問
富士重工業（株）名誉顧問
鳥取県県政顧問



吉田政博

いわみ自然を愛する会会長
但馬・因幡民俗研究会会長



山名年浩

関西大学情報学部教授
山名氏一族会相談役



山名章

山名氏史料調査研究会会長



楞嚴禪寺開山堂（常楽院）前で撮影

楞嚴禪寺研修会

七月二十三日、いわみ自然を愛する会会長吉田政博氏の引率で会員二十七名が浜坂町田井の山名家ゆかりの名刹を訪れ、二階堂承諱住職より寺の歴史を学び、伽藍を見学して半日研修を終了されました。

研修参加各位（敬称略 各列左より）

前列 吉田政博 山本茂信 清水豊 森田強二

西山勇二 岸 守 宮本亀男

中列 稲村信枝 吉沢優子 堀江富美子

二階堂承諱 牧野節子 岸本幸枝

谷口公恵

後列 田中利夫 奥山光子 稲村良一

宮本よし子 杉村弘子 吉沢利一

小谷茂雄 田中滋雄 寺尾幸昭

大川啓一 大西恵美子 田中素光

西川正治 福田幸太郎 谷口大蔵

編集後記

会誌『山名』二号の刊行が遅れました事をお詫び申し上げます。一号創刊後、太田垣佐登氏より金百万円のご寄贈を

戴き、山名氏一族の全容をわかりやすく解説したものを出版してくれないかとのご要望がありました。年表、史跡地図、写真等を盛り込み発刊できる様に準備を進めたいと思います。これには会員皆様の御協力をお願い申し上げます。

口絵の毘沙門天像は朝来町鷺原寺の十二天像の中の一冊で山名宗全寄進のものとして残っています。太田順三先生により良く解説していただきました。

垣屋三武将武者絵は垣屋家のご子孫が所蔵されておりましたものを吉田政博氏により十年前に発見されたとの事です。解説文作成にあたり吉田氏及び垣屋家菩提寺隆国寺住職太田大穂老師のお世話になりました。

『新刻日本百将伝』は浜坂町の山本茂信氏の自宅書庫の篋底から見つかり

ましたものです。今回は写真提供等に同氏より多大なご協力を戴きました。ご協力いただきました皆様には厚く御礼申し上げます。

一号に紹介しました「山名時氏文書」の様に南禅寺慈聖院より伊達家ゆかりの文書として江戸時代に譲られていたものもあります。原史料の新たな発見という作業は困難な作業であります。山名家が守護職としてかわりました国数が多い事もありましようが室町時代の歴史を公正に解明するには山名一族の研究が不可欠であると指摘される研究者の方もありますのでこれからは学界研究の先生方をお願いしてよき原稿を戴きたいと思っております。

次号の発行は来年四月末を予定して準備を進めております。山名家関係の寺院紹介もしていこうと思います。中には修復維持を必要とする文化財が各地にある様です。今回も編集にあたり柏木高行氏に協力戴きました。了

山名 第二号

平成八年十二月発行

編集発行

全国山名一族会
山名氏史料調査研究会
会長 山名 章

〒156 東京都世田谷区赤堤
五丁目四番九号

TEL〇三(三三三八)二七六九
FAX〇三(三三三八)九七三二

編集委員

山名 弘 宰
官田 靖 國

山名 年 浩

山名 源 太郎

山田 利 春

印刷 寿美術印刷株式会社

無断転載禁じます

